

第20期 国立市社会教育委員の会（第15回定例会）会議要旨

平成26年8月19日（火）

〔参加者〕 松田、立入、猪熊、佐藤、武澤、根本、矢野、柳田

〔事務局〕 津田、清水、藤田

事務局 それでは、定刻過ぎましたので始めたいと思います。皆様、こんばんは。今、柳田委員から、遅れるとのことでご連絡いただきました。太田委員、前々回もおっしゃっていましたが、研究で海外に行かれるとのことで、本日欠席になります。他に、川廷委員がご欠席です。10名中7名の委員のご出席がありますので、過半数超えて成立しますので、始めていきたいと思います。

初めに、お配りしています資料の確認をしたいと思います。いつものA4判次策をごらんいただければと思います。【資料1】視察感想（出席委員による）とありますが、左肩ホチキスどめで前回の芝の家の視察のものがございます。【資料2】章立て（案）がやはり左上ホチキスどめA4・2枚のものがございます。その他、公民館だより・図書室月報、第45回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会の開催要項をお配りさせていただいております。その他a、bに関しては、時間外のことにご参照いただければと思います。

それでは、事務局からは以上になりますので、議長、よろしく願いいたします。

松田議長 それでは、改めまして、皆様、こんにちは。ほんとうに8月、早いものでもうお盆も過ぎまして、こちらの社会教育委員の会もどんどんお尻のほうがちょっと見えてくるようなことになってくると思いますが、ほんとうにどうぞよろしく願いいたします。

では、本日は、議事としましては、前回の芝の家の視察報告が1点目、次、取りまとめの骨子という意味で章立てについて検討するというのが2点目ということになってございます。

では、早速ですけれども、まず視察の報告ということで、前回、私も、大変申しわけなかったのですけれども、参加できなかったのですが、大変いろいろな示唆に富んでおもしろかったと伺っておりますので、ご参加いただいた委員の皆様方からご報告をいただくということで進めてまいりたいと思います。

では、資料1が資料として出てございますので、じゃ、順番に矢野さんから少しお願いしてよろしいですか。

矢野委員 はい。じゃあ、簡単に。ちょっと私、何かいっぱい書いちゃってお恥ずかしいのですが、印象に残ったところからいきますと、やはり大きな違いというのは、向こうは、企業はとにかく私もNHKの現役時代にみんな取材に行ったところで、NECの本社とか森永の本社、いろいろあって、要するに、人口もとにかく、ここに書いたようにすごく昼間多いし、あと、財政力も、おそらく国立に比べると、「相当余裕があるのではないですか」なんて言ったら、「いや、最近、あんまり大したことないんです」とか何か言っていましたけど、かなりあると思います。それが余裕となって、ここに書いてあるように裁量を持たせている。普通なかなかできないところが、そういった財政的なもの含めて余裕というか、余力があるのかなと推測いたしました。

それで、2番目にこの来場者数について見ると、行った方は皆様感じたように、子どもの数よりも大人がずっと多くて、その理由は先ほど言った昼間

来る、ほとんどどこかから通いでいろいろ来られている人たちも拒まずというところがあって、ここにも書いてあるのですが、我々が帰ろうとしたときにちょうど近所の人がお弁当を持って、言ってみれば食べる居場所ですよ、そこで食べていくということで、ああ、なるほどなということを感じました。それが逆に言うと、ちょっと戻りますけど、普通、今の時代、「子どもが来たりおじいちゃんが来るところに、わけのわからない、区民か誰かもわからない人が入ってきていいの」って、すぐ誰でも言いますよね。これは結構でも、実は非常に大きなベースな問題だと私は思いますけど、やっぱりたった1,000人でも1人のそういう人がいたら、999人を犠牲にしてまでそういう施設を鍵かけて、来訪者としてのIDカードを発行したりするという社会に今なっていますけど、そういう精神とは真逆な空間だというふうには私も理解しました。

それと、この間言ったように、出発点がそもそもここに書いてある総合支所の担当者の方の発想や、あと、慶應義塾大学にそういうことをやっていらっしゃる研究室というか、先生がいた。もっと言うと、そこにスタッフの方が共鳴なさって、非常にレベルが高い人がいるということを感じましたし、財政的にも950万というお金が高いか安いかというのはちょっといろいろありますけれども、それなりの家賃も補償できるということで維持・運営できているんだと思いました。

それと、最後のところは、私どもが行って二、三時間のことで、特に子どものところについてはわからなかったもので、ホームページを見ていただければわかると思いますけど、7月の、2枚目をめくっていただくようなことも活動していると。それと、一番参考になったのは、報告書、私、お借りして、やっぱりこれを読むと、文章でいろいろ書かれているこの人たちが目指そうとするところというのは、個人的には非常になるほどなということを感じさせるものがありました。

最後、5番目、この3ページ目になりますけれども、全て同じものをするというのは意味がありませんし、それぞれの地域の個性とか財政力の問題とかそういったこともあると思うのですけれども、一つのヒントにはなる。それと、先ほどちょっと言いましたように、「雑談の効用」って書いたのですが、私もずっとNHK時代に、会議よりも実は会議の後とか終わった後にちょっとみんなで雑談するところから、企画とか人間関係のコミュニケーションってできるのってありますよね。そういったところが結局、家庭教育支援なんかもそうなのかなと。

その後、帰ってきていろいろホームページで見させていただいたら、議長の松田先生も参加なさって、文科省の「家庭教育支援チームの在り方に関する検討委員会」の「審議の整理」というのがあって、よくできているなど、私、思いました。そう思って見ると、前回、ちょっと次のテーマにかかわるのかもしれないけど、6月と5月に議長の松田先生のほうからこの柱立てを書いていただいて、こういうのでいいのかななんて疑問に思ったのですが、あ、なるほど、そういうことかということが非常によく、私は芝の家に行ったことと文科省のこの「審議の整理」を見させていただいてわかりました。納得がいったという感じです。どういうことかということ、ちょっと先走っていきますけど、普通、何かこういう審議会とか、委員会なんかもそうですけど、こういうふうになってほしいということがあって、そのプロセスとしての手段を提示するという感じがありますよね。私、この1年半ぐらい参加して、前回と違ってなかなか難しいなという気がしていたのですが、何か立入さんが時々言うように、ふらっと行けばいいんじゃないのという、ああいうのって、私、理解できなかったのですね。問題を抱えた人が

行って、そこにちゃんと明確に向き合って答えを出すべきじゃないのかなというちょっと理屈っぽい考え方だったのですが、やっぱり雑談の効用、これってもしかしたら我々が今求められているというか、特に家庭教育って家庭も一様ではありませんし、いろんな人がいるから子どもって育つのですよね。だから、子どもだけ集めて何かやれば家庭教育支援になるというものでもないのかもしれないし、どこまで手を広げるのか難しいですし、その地域の個性や、太田先生、本日いらっしゃいませんけど、地域の資源とよくおっしゃいますけど、そういった身の丈に合った形でぼんやり出発していくことが逆にゴールへ向かっていく。ゴールあって手段を持っていくのではなくて、とりあえず身の丈に合った手段みたいのをうまく仕掛けていくのが今回の我々の手というか、ミッションなのかなということをお個人的に納得してしまいました。

どうもすみませんでした。

松田議長 はい、ありがとうございます。資料も写真も入れていただいて、非常にうまくまとめてくださっていましたので、私もなるほどなと思って見させていただいていたのですけれども、今、ご報告いただきましたが、委員の皆様方から何かご質問とかございましたらお願いしたいと思います。

佐藤委員 質問よろしいですか。佐藤です。矢野委員がいっぱい書いてくださっておかげで、私、行けなかったのですが、様子がわかりやすくてよかったですと思いました。

1枚目の2の芝の家の来場者数のところ、これ、単純な質問ですが、子どもよりも大人が多いと言いましたけど、お年寄りと大人を分けていますよね。お年寄りというのは大人に含まれているのですか。それとも。

矢野委員 いや、年齢でいくとやっぱり65歳。

佐藤委員 65歳以上を。

矢野委員 はい、お年寄り。

佐藤委員 お年寄りということで、それ以下の人は大人というカウント。それだったら、子どもの数が2,362人(32.1%)になっていますね。で。

矢野委員 あ、数字が合わない？

佐藤委員 うん。ちょっと数字が合わない。

矢野委員 おかしいな、写したはずだったのですが。

佐藤委員 合わないのですが、この辺だけちょっと、1日平均。

矢野委員 これはもとの資料から引っ張ったつもりですが、ちょっと打ち間違いかもしれません。失礼しました。

佐藤委員 お年寄りのほうが多くて、子どものほうが少ないのに、子どもの数のほうがこれでは多くなっているから、その辺どうかなと。

矢野委員 はい、どこかちょっと数字を間違っていますね。

佐藤委員 最初に思った。どっちが正しい、細かい数字はいいと思うのですが、子どものほうがお年寄りより少なかったのですか、1日の来場者数として。

矢野委員 要するに、9対16対3。

佐藤委員 はい。じゃあ、それが正しいということですね。

矢野委員 はい。

佐藤委員 はい、わかりました。じゃあ、これで見ると、大人が多くて、子どもが次に次いで、お年寄りは少ないけれど、出入りはあるということですね。

矢野委員 そうですね。

佐藤委員 その子どもたちというのは、お友達関係で来ているのかしら。それとも、わりと1人ずつ来ていたような。

矢野委員 結局それが、我々が行った2時間の間に子どもというのはゼロですし、推測するしかないのですが、お話を聞いたところによると、いつも来るのもいれば、グループで来たりして、それで遊ぶのも一緒にやっているかと思うと、1人ひねくれたのがいて、ゲームをやってもいいのですって。みんな水まきやるのだけど、「僕は水まきなんかしたくないよ」とか言っていましたよね。「みんなでやるの嫌いなんだよ」とかって。

佐藤委員 それはいるでしょうね。

矢野委員 だから、出入りもよくわからないけど、とにかく数字だけは押さえておいた。

佐藤委員 じゃあ、お友達同士で来たか、ばらばらで来たかとか、そういう細かいところはあんまり詮索しないようにして。

矢野委員 イベントのところでは——この2ページにある、月に何回かイベントをやります。それはみんなで共通で一緒にやるそうですが、ほかは来たら勝手にしゃべったり、ゲームしたり、水まき遊びしたり。

佐藤委員 一応カウントはしているけど、それ以上の動機やら何やらは聞いてないということですね、来た人たちに。

矢野委員 そこが雑談の効用で、黙ってやっているわけじゃなくて、その呼吸がこの人たちのレベルの高さかなと僕は思うのです。

立入副議長 常駐のスタッフの人がやはりコミットメントというか、かかわって何かしら聞き出したり、あえて、自然にほんとうに聞き出して仲よくしていて、そのゲームをやっているという子も1人でゲームをかたくなにやっているのではなくて、ぼそぼそと周りの人のことについて言っていたりとかってするのをやっぱりスタッフの人が見ていて、様子は全部把握しているという

印象は持ちましたね、そのエピソードの中で。なので。

佐藤委員 様子は把握しているけど、一々そういう細かい詮索を入り口でやるわけではなくて。

立入副議長 そうですね。

佐藤委員 自然のコミュニケーションの中でそれを発揮しながら、居心地いいようにつくっていくことが。

矢野委員 ですね。

立入副議長 そうですね。

矢野委員 それはもうお年寄りもそうなのですって。

立入副議長 時間をかけて。

矢野委員 お年寄りって、座ると、お年寄りのほうが勝手に自分のことばかり言うじゃないですか、僕も含めて。だけど、それを遮らないで、聞いてあげる。レスポンス、ここにも書きましたけれども、これは僕、相当レベル高いと思った。普通、嫌になっちゃいますよね。

立入副議長 そうですよ。

矢野委員 このおじいちゃん、何度も同じ。

立入副議長 そうそう。縁側にいる人と立ち話という人のカウントをしてあって、縁側はもう芝の家の中に入った人とみなしていて、縁側に座った人と立ち話をする例えばご老人がいたとすると、その立ち話の人は立ち話の人にカウントされていて、とても細やかに観測されているというか。

矢野委員 管理能力があるのだけど、それを前面に出さないのですよ。

立入副議長 そうですね。そうなのですよ。

矢野委員 普通は逆なのですよ、今。俺は管理しているぞということを見えるように今の社会は成り立っているのだけど。

立入副議長 とても自然な感じ。

佐藤委員 じゃあ、公共施設だったら、管理をしなければいけないというのが一番に来るものだから、そこのところが参加したのは誰々でみたいに書かせたりすることってあるけど、そうじゃなくて、人間関係とかコミュニケーションをつくることでそれを把握しながら次につながるように働きかけをしていくという。

立入副議長 そういう感じでした。

佐藤委員　そういう感じですかね。

猪熊委員　屋根のある公園でしたっけ。

矢野委員　あ、言っていたね。

立入副議長　そう、って言っていましたね。

猪熊委員　何かコンセプトが。

矢野委員　公園、屋根がどうか。

佐藤委員　それはわかりやすい。

猪熊委員　ええ。公園は別に、行って、自分が何の目的で来たとか誰も言わないので、それがたしかコンセプトだったような気がします。

立入副議長　曜日と時間帯で決まっているって言っていました。大人が来る日と子どもが来る日と。たまたま私たちが行ってお話を聞いた日は終業式の日で、防災訓練か何かがある、学校に集まって全員そこに行くようにしなくちゃいけないときで、それで小学生は来ないという。

佐藤委員　つまり、学校の行事とかもそのスタッフはちゃんと把握していて。

立入副議長　そうですね、そういうことですね。

佐藤委員　この地域で本日は何があるから何々だよというのを。

矢野委員　2つしかないのです、あそこ。僕も聞いたのですが、2つしかないのですよね。

佐藤委員　それは把握をして。

矢野委員　学校が。

佐藤委員　小学校が2つ？　中学校は？　地域の。

矢野委員　1つか2つでしょう。2つ以上はないでしょう。

立入副議長　地図で見た限りは1校すぐそばにはありましたけどね。

猪熊委員　ですね、ええ。

佐藤委員　中学が？

猪熊委員　ここのあいている時間が夕方の5時までなので、中学生はちょっと利用しにくい時間帯かなという。

立入副議長　そうですね。

矢野委員 あそこね、中学生来てないでしょう。

猪熊委員 来てないですよ、おそらく。

立入副議長 そういう雰囲気、何か時間帯が12時から5時なので。

佐藤委員 12時から5時ね。

立入副議長 とてもそういう人が、ちょっと大きい子が入れるような時間帯でもないかもしれない。

佐藤委員 じゃあ、ちっちゃい子どもさん連れた人たちはわりと。

矢野委員 それは来るって言って言っていました。乳母車に子ども連れて、最近引っ越ししてきたのだけど、話し相手も誰もいないので、来て何かね、お茶飲んで、スタッフの人として、ああ、そうですかって言って帰っていく若いお母さんがいるとか言って言っていましたよね。

佐藤委員 そういうつながりはあるということですね。

猪熊委員 スタッフになってしまったお母さんもいる。

矢野委員 あ、そう。スタッフになっちゃったお母さんもいるって言って言っていましたね。

佐藤委員 ああ、そう、来ている間にね。

猪熊委員 ええ。

佐藤委員 顔見知りになってね。

猪熊委員 はい。

佐藤委員 やっぱり地域の効用ですね、そこは。では、運営側と参加する人が行ったり来たりではないけど、交流できる可能性があるわけですよ。どっちかに立場が変わってもつながるとい。

矢野委員 そうですね。

佐藤委員 ありがとうございます。

事務局 すみません、ちょっと数字的な、今、矢野委員さんの出してくださった資料の数字が間違えているというご指摘があったので、ちょっと確認をしました。来場者人数のところでお年寄りの数が341となっておりますが、872。

矢野委員 全然違うじゃん。どこから持ってきたの？

事務局 これ、ちょっと、私、確認を今しませんでしたので、後でまたお伝えしま

すが、ちなみに、子どもというのは乳幼児から中学生までで、大人というのは高校生から65歳未満というふうにとってしまった。お年寄りは65歳以上、先ほどお話があったとおりですね。

以上、補足になります。

松田議長 ほかはいかがですか。これ、矢野委員の写真で、近所の会社員の方がお昼にお弁当買ってこられたのですよね。これ、すごくおもしろいなと思ったのですが、お弁当食べに、要するに買ってここへいらっしゃるわけですね。

矢野委員 はす向かいが弁当屋なのですよ。でしたよね。

立入副議長 そうでしたね。

矢野委員 そこだけじゃないですけど、結構そういう弁当屋みたいなのがいっぱいあって、食べる場所がないのですって。で、会社へ戻って上司の悪口言いながら食べるのも不健康ですから、半分冗談ですけど、言っていましたよ。それでここを利用してもらって、お茶出してあげるのだけど、「それでもいいんです」って言っていました。

立入副議長 一番初めは何か、どうしましょうかということにはなったみたいですけどね。

矢野委員 うん。

立入副議長 でも、だんだんその人が何か裏方で仕事してくれるようになってきたりとかして、だから、企業のそういう昼休憩に来るという人は全然拒まない雰囲気でしたね。

矢野委員 うん、全然。自然に入ってきてっちゃうのです。

松田議長 なるほどですね。

矢野委員 僕らがまだしゃべっているところにぐーっとね。

佐藤委員 それ、ものすごくおもしろい光景ですね。

矢野委員 おもしろいですよね。

立入副議長 ほんとうにオープンスペース。

佐藤委員 屋根のある公園ですよ。

立入副議長 うん。

松田議長 これ、住民というわけじゃない。

立入副議長 ですね、はい。

松田議長 限らないで。

矢野委員 おそらく住民じゃないですね。

佐藤委員 来る者拒まずなんですね。

立入副議長 そうなのですよ。

松田議長 だから、スペースがわりと小さいですよ。何か集団で来て独占しちゃうとかということはあんまり起こらない？

猪熊委員 けど、男性のいろいろ企画してやってくださった方がいるという話では、お昼食べに来ていた六、七人ぐらいの人がという話だったので、それが集団でいらしたのか、ぼつぼついらして六、七人になったのかまでちょっとわからないのですが、でも、スペースから考えるとそれが独占ぎみな感じにはなるのかなと思います。

立入副議長 うん。時間帯も結構みんなずれているのでという雰囲気はありましたよね。ずっとべったりいるという雰囲気ではなかったですよ。

猪熊委員 お昼の時間帯なので、長くても1時間というか、ぐらいかなと思います。独占という感じじゃないと思うのですが、何か話しているうちに六、七人ぐらいで輪になっちゃったのかな？

立入副議長 うん、そうですね。何かそこを通じて知り合いになったみたいな人もいるような話をしていましたね。

松田議長 ほか、よろしいですか。

柳田委員 柳田です。私も欠席をしてしまいましたが、このようにさまざまな方がいらっしゃって、いろいろなそういう場となるというのはすばらしいことだなと思いますけれど、ただ、芝の家のような場があるということは、区というのほどのように広報されているのでしょうか。行った人が。

矢野委員 広報的には、それも質問したはずですが、区の広報とか出たり、それで、これに近いのをまた新橋駅前にもう1個つくったのですね。やっぱりタイプの違うところをやって、積極的に広報しているわけじゃないですが、あと、この報告書の中にもあるのですが、あそこにはコミュニティルームがあって、時々、ここを基点にラジオを発信しているようですね。

柳田委員 区民が、人数もたくさんいらっしゃるでしょうし、どのような人たちに来てもらいたいのか。興味をもって—見る人はそういうふうには情報を見るかなと思うのですが、もうここでもお話がありましたけれど、届いてもらいたい人というのですか、そういう人たちのところまで情報は行くのかなんていうふうなこともちょっと考えてしまって、そういうところがもう少しどうなのかなとちょっとお聞きしたくて述べました。

立入副議長 曜日を踏まえというのは、土・日というか。

矢野委員 毎月こういうイベントの紙を配付しているので、これを全区民に配って

いるとは思えないのですけど。

立入副議長 来た人によって感じですよ。

矢野委員 うん。それと、あの地域のところにどういう周知をしているのかは。認知をあそこで比べたら、実はあんまり知られてないと思うのです、ほんとうは。

立入副議長 何かね、外から見学する人が多い。私たちみたいな人が来る。なので、大人の数が多くなって言っていました。だから、港区芝でも何かフラッグショップみたいなイメージはあるかなという話でした。こういう余裕があるんだよみたいなところを感じましたね。だから、「どうぞこういう試みをみんな試してみてください」、みたいなお話はしていましたよね。その新しくやり始めたというのは港区総合支所ということで、ちょっとお役所的なところで、それも慶應大学の同じようなプロジェクトの事業でやっているのですけど、芝の家ほどは人がそんなには来ていないみたいな、だから、まだ始めたばかりなのでとおっしゃっていましたが。芝の家も普通のビルなのです。ビルなのですけど、とても昭和の家のように味つけが全部してあって、木で全体を囲ってあって、中も木ですし、見た感じがちょっと昔の家のようなぱっと見がする外観なのですけど、それは一生懸命つくったもので、だから、ビルをそのまま利用したというのではなくて、そこの味つけはとてもうまいなとか、上手だなという感じでした。ちょっと何だろうって思っただけで、見てみたいくなるようなイメージはあるのですよね。だから、窓もあけっ広げにしてありましたし、縁側がすぐそこにあっという間にいろいろな物が置いてあったりとかして、何かちょっと整然ときれいという感じではなくて、きれいはきれいなのですけど、きれいな形というのではなくて、もうちょっと何か近寄りやすい雰囲気ですね。

佐藤委員 その総合支所の担当者のクリエイティブな発想からスタートしたとかいう話でしたけど、運営するスタッフの力量が大きいというのも。

立入副議長 そうですね。

佐藤委員 皆様言っていられるのですけど、人件費が運営費の中の3分の1って書いてありましたよね。実際はどれぐらい、例えば時給に。

立入副議長 何かコアな人が10人ぐらいいて、その中で時々参加するとか、もうボランティアでいいからお金は要らないよという人も含めて20人ぐらいスタッフの人がいて、月1で出てくる人もいれば。

佐藤委員 コアな人のお給料と言ったら変ですけど。

立入副議長 常時3人ぐらいはいらっしゃるって言っていましたね、事務局として。そのお話をしてくださった方もそうですし。

佐藤委員 月に幾らとかというのは聞いていらっしゃいますか。

立入副議長 それは伺いませんでした。

矢野委員 いや、というかね、加藤さんが言ったのでいくと、これもなるほどなと思ったのは、「これしか出せないんですけど」って言うんですって、最大で。「向こうで言ってください」と言って、「出せないんです」と。で、要らない人は「いや、要りません」と。「いや、交通費だけいただけますか」という人もいます。だから、全く自分でほんとうのボランティアでやっちゃう人もいますし、交通費だけもらう人もいますし、ちょっといただければというので手当てじゃない、日当みたいなものをもらっている人もいますし、だから、そういう規律というか、そういうの無いのですよね。時間単価500円とか時間単価、そういうの全くない。それ、絶対ないです。

立入副議長 自己申告じゃないですけど、気持ちとお金がその人それぞれの契約じゃないですけど……。

矢野委員 不思議なのです、そこは。

立入副議長 いいですよという感じで。

佐藤委員 いや、微妙だなと思って。

立入副議長 そうですね。でも、5年目って言っていたかな。最初のころ手伝ってくれた人たちはやっぱり学生の人たちも多くて、一回りしてしまっ、また新しい人たちが来てくれているというような話をしていたら……。

佐藤委員 いや、なぜかという、国立でいう以前のNPO活動支援系の地域コラボ、あの辺の活動と少し話がリンクしているので、それこそ武澤さんに伺ったほうがいいかなと思うのですが、国立でもあそことKF（富士見台人間環境キーステーション）と、あの2つを合わせたような感じがちょっとありますよね。その辺の、国立でもほら、いろいろな形で先行しているところもあるから、それとのうまくいっている部分、うまくいっていない部分ってあるのでしょうか、お金のこともやっぱり大事なので、聞いてみたいかなと思ったのです。やっぱりある程度ボランティアでいいよという年代の人ならいいけど、若いスタッフをずっと常駐させるようになればある程度やっぱり必要になると思うのですよね。必要で、それはやっぱり確保すべきじゃないかなと思って、それもあってちょっと伺ってみたいかなと思ったのです。その上で……。

立入副議長 だから、ちょっとお金が欲しいときは余分に働くみたいな学生さんの話もしていたら……。だから、今月はちょっといっぱい出るからみたいな、そういうのを、みんなのローテーションをみんな決めてみたい話をしていました。

猪熊委員 表現忘れちゃったのですが、主婦ではない何でしたっけ、主婦ではなく、学生でもなく……。

立入副議長 はいはい、言っていました。

猪熊委員 っておっしゃっていましたよね。

立入副議長 はい。

猪熊委員 表現を忘れちゃったんですけど、主婦でもなく、学生でもない、40代の方もいらっしゃいましたねは何て言っていたっけ。 でもない方とかも。

矢野委員 さっきちょっと紹介しましたが、文科省の松田先生が出ていらっしゃる「家庭教育支援チームの在り方」というところも、今ご提起のあった行政の補助の関係とかのお金のことであるんですけど、それも要するに個性だとか、地域によってやるという、僕、それも含めてなるほどなと思った。これを基準決めて、何かそれこそあまねく全国統一の時給1,000円とかなんとかということをやると、大体うまくいかないのですよね。これはやっぱりその地域、産業力、財政力とかいろいろのありますよね。そういったのも書かれているから、あ、そうだよねと。僕、だからこれも納得したのです。普通だったら、決めようよと。交通費は実費で払うとか、1,000円以上は交通費出さないよとか、いろいろ基準をどんどん決めていきますよね、今までの社会って。それってきつとうまくいかなくなる。それ、特に行政からお金をばっと引き出してしまう。だから、ここの精神、ここに書かれているというのは、そういうことも含めて書かれているのだろうなって。全国見ればいろいろな地域があるから。

松田議長 あと、他の皆様のレジュメもありますので、じゃあ並びで武澤委員からお願いしていいですか。

武澤委員 あ、私ですか。

松田議長 はい。

武澤委員 はい。じゃあご指名で、武澤です。私はですね、今もいろいろ議論出ましたけれども、ここに書きましたように、最初、この家庭教育支援というのが私はどうもまだまだ理解不足で、一体何だろうなという感じでいて、それで先進事例だということで、いや、それは見なくちゃいかなんということで見に行ったのですけれども、見に行く前に、ホームページを見たときは、これ、ほんとうに私として見る価値があるのかなという疑問で、だけでも、先進事例だということで見に行ったのですけど、やっぱり見てもあんまり僕は得るものはなかったのです。

それはなぜかということ、僕は13年もNPOをずっとやっていますので、これと同じようなことはずっとやってきているのですね。で、何が大事かということ、今のいかに金を生んでみんなに払うかというのが、これが非常に難しい。今、NPO支援室というのは地域コラボと名前が変わっていますけれども、そこは市から140万の補助が出ています。大体半分家賃で、半分人件費でやっているのですけれども、殊に教育という面ではここよりももっと具体的にいろんなことをやっているとします。教育にもっと具体的にですね。だから、ここで皆様が感心しておられるようなことが私にはまだ理解できてないということなのですね。それは市の全体のいろんなやっている、市もいろんな委員会とか活動センターとかありますから、そういうところを全部見なくちゃいけないのではないかな。ここはそのうちのほんの一部じゃないだろうかと。もっといろんなものを見るべきだということと、それと、この芝の家を見て、じゃあ国立では何をやっているのだと、それを比較してみて、あ、国立のほうがやっている部分はあるなと。国立はここが弱いと。ここをもっと補充したほうがいいなとか、そういうことをやればもっともっと生き

てくるのではないかなというふうに思います。

それと、3番目に書きましたけれども、国立はインクルーシブ教育というのをやると、こう言っているのですね。これはこの前聞いたばかりで、これは一体何だろうと思っているのですが、これを見ると、まさにオールラウンドの子どもたちの教育をやるということですから、社会教育支援ももっともっとこれとリンクするということなのか、カバーするようなことを考えていかないと、少なくとも我々だけじゃ、これはまた全然違ったことにほんとうに発展するかもしれないという心配をしております。

以上です。

松田議長 はい、ありがとうございます。何かご質問なりございましたらお願いしたいと思っておりますけれども。

佐藤委員 じゃあ質問で、武澤委員さんの感想の2に「昼食時の会話の方が参考になった」って書いてありますよね。

武澤委員 そうそう。

佐藤委員 そこで、例えば3番の「童話で怖いものは怖いものと教えるべき」と書いてありますよね。これはそういう話題が出たということですか。

武澤委員 それはそのとおりです。そこで話が出たということで、私はそっちのほうがおもしろかったという。

佐藤委員 で、「ライオンや狼と直ぐ仲良くなるのはおかしい。平和ボケの原因になる」というのは。

矢野委員 これ、武澤さんがご自分で言ったのです。

武澤委員 これは自分で言ったのです。

佐藤委員 え？

矢野委員 自分で言ったのです。

佐藤委員 ああ。いや、だから、どこで誰がどんなふうに言ったのかなって。武澤さんが。

武澤委員 これ、3番は私が言った。

矢野委員 いや、全体を言うとね、太田先生が、最近は大学院でも、「何を研究したらいいのですか」とか「就職するためにはどんなテーマを勉強したらいいのですか」と言う人がいて困っているのですよねとかいう流れの中で、子どもに教えるべきことを教えてないのではないかとかいう中で、武澤さんが、大体、本などなどがおかしいから教育がおかしいのだということ言い出したのです。

佐藤委員 ああ、なるほど、そういうあれだったのですね。

立入副議長　すごいやつと覚えている。

猪熊委員　そうですね。

佐藤委員　ご自分のご意見を述べられたという。

武澤委員　そうです。

佐藤委員　ああ、そうですか。

矢野委員　参考になったという、何か人の話が参考になったのではなくて、自分の話が参考になった。

武澤委員　じゃあ、括弧してそうだというふうに。

佐藤委員　わかりました。いや、参考になったって、これ、どういう場面で言われたのかなど。

矢野委員　2番もそうですよね、だから。

佐藤委員　あ、2番もそうなんだ。

矢野委員　だから結局、一連の最近の学生さんというのも大変ですねとかいう話になって。

佐藤委員　じゃあわかりました。矢野委員の注釈でやっとわかりました。

松田議長　今まで武澤さんがわりとNPOをずっとなさっていて、その意味でいうと、こういう会話を交わしている時間とか場というのは、これまでのNPO活動の中には逆に言うとなかったですか。

武澤委員　どういう会話？

松田議長　武澤さんがここでご自身の言葉を。

矢野委員　2とか3。

武澤委員　2番の(1)、(2)番？

松田議長　ええ。これは太田先生の。

武澤委員　きっかけではありましたけど。

松田議長　中でお話をされたという、そういう場とか時間というのは、これまでのNPO活動の中では。

武澤委員　この(2)番は、もうこれはたくさんありますけれども、(1)と(3)というのは、この辺はあんまりないですね。

松田議長 この話をされるということは。

武澤委員 はい。

松田議長 おそらくこういう話というのは、太田先生なら大学の先生だとか、NPOを相当なさっている武澤さんとか、NHKですごくいろいろ見られている矢野さんとか、いろんな方が集まられて、それで話題がお互いに引かれ合っていて出てきているようなところがあると思うのですが、何かそういう場を意図的に作り出すということはできるのですかね。

武澤委員 それはできると思いますね。

松田議長 先ほどの最初のお話を聞いていると、何かそういう場がこの芝の家の一つの特徴になっているということなのですかね。いろんな方がいらっしやるので、適当にいろんな話が始まっちゃうということですかね。

佐藤委員 私が武澤委員さんに質問した理由は、こういうことが、昼食の会話というのが、その地域の人やら何やらの会話がこういう話をしているのかと思ったのです。参考になったっておっしゃったので。ご自分たちの食事をしているときのこのあたりの会話だった。

武澤委員 そうです、そうです。

佐藤委員 というのはちょっとわからなかったのですよね。

武澤委員 どうもすみません。

佐藤委員 いえいえ。(笑)わかりました。

松田議長 じゃあ、加えていただくような形で猪熊委員のほうからもお願いしてよろしいですか。

猪熊委員 皆様すごく立派に感想を書かれていて、私、箇条書きで簡単に申しわけないのですが、人材とか立地とか財源の話は矢野委員のところまで十分書かれていて、皆様もすごく納得されたのであえて私が説明しなくてもいいのかなと思います。ほんとうにいいところだなと思ひまして、とっかりとしてまねしていくということはすごく大切なことかなと思ひますが、じゃあ実際、これ、まねしてみても、国立でこれを置くとしたらどこがいいのかなとか、例えば全く同じものをやるとしたらどの地域でどういうところにこれを建てたら一番いいのかなとか、逆に、少し改良し、例えばですけど、じゃあこれは東に置きましようってしますが、それで東で例えばこれがうまく合ったとしても、じゃあこれ、中の地域だったらこれでいいのかなとか、じゃあどういうところを改良すれば中地域にはこういう合うものになるのだろうかという、このまま持っていくのだったらどこが合うのか。じゃあ、合わないところは何を改良したら――改良と言うのも変なのですが、合うようになるのだろうかというようなところをやっぱり考えていくところがあるかなというのは、視察してみてちょっと思ひました。

あと、先ほどからお話にでていたみたいに、今、12時から17時という時間帯だったので、小学生だったら17時ぐらいまでなのかなというのはあ

りますが、子どもという意味にすると、もうちょっと、30分ぐらいでも延ばすと、少し子どもの利用も増えるのかなという感じもしました。視察に行っている時間帯、子どもの利用がなかったのも、どんなふうに子どもが入ってくるのかというのが見られなかったのは残念でしたが、ただ、道を通ると中が全部見えるので、例えば、あ、あいつ来ているから行こうかなとか、逆に、本日はあのグループが来ているからやめとこうかなみたいなのも、見てわかるので安心です。親としてもあえて何枚も玄関のドアをあけて入っていくところじゃなく、通りがかりに見える場所なので、子どもが行ってない時間帯にどんなところか確認できるので、子どもが「あそこに行くって」っていえば、「ああ、あそこね」って言えますよね。すごく管理されていて安心できるという場所じゃなく安心できる場所だなという感じは非常にあったので、そういう感じを国立でつくるというのがなかなか難しいのかなと思いました。

松田議長　ご意見とかご質問あれば。

柳田委員　じゃあ、すみません。来ている人たちで、大人がどのくらいとか、そういうのはわかったのですが、例えばおやじの会みたいな、男性陣なんかがその時間帯に時間のある人、わからないのですが、本日は休みだからちょっと行ってみようとか、そういう雰囲気というのはどうなのですかね。そういうのも。

猪熊委員　男性の利用者の場合は、休日は、土曜日とかは、何か矢野委員の報告にあった。

矢野委員　レコードコンサートというのをやっています。

猪熊委員　そうそう、そうそう。

矢野委員　何か近所の商店街の自慢のジャズのレコードがあるので。それを言っ、半分ディスクジョッキーとかしながらやって、そこにみんな男の人たちが来て、つまみを持ってきたりして、みんなで食べながらしゃべりながらジャズを聞いてというのが、今、人気があるとかが言っていましたね。

猪熊委員　それはちょっと遅い時間帯にやっているとかがいいます。

矢野委員　6時半から8時まで。

立入副議長　うん、って言っていましたよね。夜。

猪熊委員　それは地域の人なのかもしれないですが、やっぱり近くに勤務している。

立入副議長　最初、お弁当を食べに来ていた人が。

猪熊委員　食べに来ているという人たちが何かを企画するというような、それは地域の人ではないようだったので、お休みの人が来ているという感じじゃない。

立入副議長　で、「芝でこそ」という活動が、子どもと週末に月2回ぐらい開いてい

ますということなので、そういう人たちは集うボランティアの人もいるようで、それは各自でいろいろ意見を出し合ったりとかというふうな雰囲気ですね。なので、お仕事中はできないけれども、こういうときに参加するという人もいるみたいな話をしていました。

猪熊委員 先ほど途中になっちゃったのですが、表現がわからない、いわゆるお仕事をしていない40代ぐらいの男性という方がスタッフに入っていて、そういう方にはやっぱりお給料を出しているという話をされていたので、そういう方への支援というか、居場所とか、働き場所というほどではないとは思いますが、社会へ出てくるという場所にも少しなっている。

佐藤委員 よろしいですか。公民館の活動なのですが、公民館で未来夜話という社会教育学習会というのをやっていて、今年9月に企画をしております。そのときに、いつもこれ、わりと若い人の参加が多いあれなのですが、子ども相手というよりは若い人向けの、ないしは地域で何かをやりたい人のための企画なのですが、地域と人を結ぶ、居場所づくりとか、そういう体験を話してもらって、例えば国立本店というの、ありますよね。

立入副議長 はい。

佐藤委員 とてもユニークなおもしろい活動をしていますよね。あれとか、高齢者の人の居場所づくりをやっているグループがあったり、シェアハウスで、ただ一緒に住むだけじゃなくて共通の部分に地域の人が出入りできるようにというふうな試みを空き家を借りてやろうとしている若い人とか、そういう、今、まちおこしでいろんなことをやりたいという人たちが集まって、みんなでどんなことができるだろうみたいな人が、人と人を結ぶような活動をどうしたらできるだろうというのを、この未来夜話ではずっと企画をしているのです。で、今回の9月もそれをやって、とりあえず未来夜話という4回シリーズでやってきた最後ということで、必ず最後にみんなに分かれてテーマのおもしろいところに集まって自由に話をして、それを最後に発表し合うのですが、グループでいろいろ話し合っただけで、そのグループを途中で取りかえたりしながら。それがわりと活気のあるものなので人気があって、いつも30人以上、公民館で企画して集まる会なのですが、そこで今度やるのですよね。

で、やるときに、前回に空き家を活用して何かをやりたい、国立で何か動きをつくりたい、人と人を結びたいみたいなのが一番話し合いの中での上位人気だったのです。前回のときに投票したのです、参加者全員で。それを今度はテーマにしてやってということで、今度はそういう空き家なり場所を活用して人を結ぶ活動。その対象に子どものところは今回実は入ってなかったのですが、いっぱいそういう動きが今、国立の中であると思うのです。だから、もう現実的に何年間も活動して結構参加者の多いところもあるし、始めたばかりとか今からというところもあって、今、ほんとうにこれがおもしろいみたいな形になってきているのですよね。その中で子ども相手のものもできるのではないかなということちょっと期待しているところなのですが、それとコラボすれば、さっきのような話も、芝の家のようなものの民間バージョンみたいなのが可能性としてはないわけではない。それをどう支援していくかというところはあるかもわからないけど、今挙げたような国立本店とかたまり場をやっているらっしゃるようなグループは、補助金はもらったかもわからないけど、市からの支援というのは受けてないのですよね。

自力でやっている。動きは町なかであるのではないかなというふうに思います。だから、関心のある人は、9月27日の夜やりますので。公民館の地下ホールでやります。誰でも参加できますので。

松田議長 立入さん、お願いしてよろしいですか。

立入副議長 私もぼやっとした感想だけで終わっちゃったのですが、国立でもいろいろな試みはされていたりとか、具体的に何かあるのですが、何かこの雰囲気が違うなと思ったのが、何かを決めてない緩やかさのよさとか、きっちりしてないよさというのを感じたのと、それまでの過程できっちりしてないのを見せていないのだから。表立って見せないけれども、最終的にやる段階ではきちんと決めているのだけれど、表に出してないみたいな、そういうよさがあるのだなというのを感じて、スタッフの女性の方も、もともと幼稚園の先生だったらしいのですが、子どもとかかわるのを園とか学校とかというところではない外で、地域で何かかかわることをしたいなと思っていらしたんですね。それで芝の家の前身の三田の家というのがあって、そこでやっていたことに加わってこういう展開になったという話でしたが、なので、やっぱりそういう理想とか、こういうふうにしたいというイメージはとてもあるのだと思うのですが、それが押しつけなく、とても緩やかな感じで人を受け入れている。例えば立ち話のおじいさんの話なんかでも、温かい姿勢とか、何ていうのでしょうか、雑談で聞いている内容なのですが、人が人としてしゃべりたくなるような空間ではあるのだなというのを感じましたけど。ちょっと疲れたから縁側に休んでしゃべっていたら、通りかかったおじいさんが、顔見知りではあるのだけれど、口をそれほどきいている人ではなくて、ほんとうは92歳なのに、そのおじいさんと張り合ったことで——お二人ともおじいさんだったらしいのだけれど、「俺は85だ」とか全然違う数字を言っていておもしろかったという話を言っていたのですが、そういう人と人との出会いきっかけをちゃんと考えてつくってはいらぬのだと思うのですが、それをあえて人に出会うときに、ここからこういうふうにしませうねというような時間枠で決めてあるとかということがあんまりないとか、曜日によってその日は何の曜日って決まっているみたいなのですが、そのスタッフの人はちゃんとお話し合いはしているようですが、来る人たちに対しての何ていうのでしょうか。人に接する、コミュニケーションをとるといふこと、表立って——すごくスキルが高いって矢野さんがおっしゃっていましたが、何か人を信じているのだなという感じのよさを感じる。

佐藤委員 じゃ、スタッフのやっぱり運営能力とか、個人の能力というものが、非常に潤滑な運営になるにはそれが大事だということですね。

立入副議長 そうですね。それと、区としても、その施策自体が、皆様に「こういうことをやったらいかがですか」みたいなフラッグショップ的なところはあるんだなという。だから、たまたま区の方の発案で、やっぱり古くから住んでいる地域の住民の方と、高層マンションでどんどん新しい方が来ますよね、そういう人たちを引き合わせるのにはどうしたらいいかというところから、「じゃあ、こういう場所をつくっちゃえばいいんじゃないか」と言って、それで慶應義塾大学の先生に、そういう専門の先生に相談して具体的に立ち上げていったということなので、やっぱり最初のきっかけは区の方針かと思うのですが、でも、それからそうやって展開していく段階がやっぱり綿密な

ものがあるなという気はしました。建物のたたずまいといい。先ほどの猪熊さんがおっしゃったとおり、国立で生かすとしたらという話とか、私も佐藤さんがおっしゃっていたみたいに、いろんな拠点——国立も、ちっちゃいとはいえ、北の方は、谷保のそういうお店があったとしても、行きたくてもそんなにしょっちゅうは行けないと思うのです。だから、地域、地域に、毎日じゃなくても、最初は月に2回でも、そういう人が何かしゃべれるような場所をつくれれば、時間帯を設ければ、いろんな場所にあればいいなというのは感じて帰ってはきましたけど、だから、それまでのスタッフの集め方というのはやっぱり大変なのだろうなという気はしました。

矢野委員 ちょっといいですか。先ほど私、運営するスキルが高いというよりは、私が思っているのは、おそらく相当この先生とか行政の方とか、この加藤亮子さんって元幼稚園の先生とかね、実は違うと思うのです。僕はおそらく相当議論していると思います。この報告書を見たら、これは相当議論した上でコンセプトを共有できるものだけでやっていると思うのですよ。この辺がやっぱり何か、この前も言いましたけど、日本人にはなかなか理解しにくいのです。やっぱり日本人って自分たちと価値観が近い人しか群がらない集団ですから、だから、先ほど議長がおっしゃったように意図的に場をつくるじゃないけど、結構、僕はこれ、きっといろんな喧々譁々の議論の上、緩くしたところがレベルが高いと思うのです。普通だったら排除しますから。あいつと俺とは関係がない、お金が欲しいとか何かね、いろんな理屈を立てて、壁を、仕切りをどんどんどんどんどん作り始めちゃう。それがほんとうはあるのかもしれない、人間ですから。でも、それを言っちゃおしまいだということをやっているところに僕は一定評価しますね。あとは、何度も言いますが、地域によってそれはまねする必要もないし、やっていることもあるのだし、いいんですよ。いいところもあれば、人間だって悪いところもいっぱいありますよ。だけど、やっぱりいろんな考え方、そして子どもということに視線を向けていったときに、いろんな角度、お年寄りとかいろんな人たちがいることが、何がプラスか、何がマイナスかはわからないということで、この人たちの共通土俵ができていのかと思いました。だから、子どもを育てるということは大人を育てなきゃいけないと。だから、武澤さん、ここに書いていますが、大人が未熟だから子どもまで未熟になっていっちゃう。太田先生も言ったのですが、それ言ったのですよね。卒業式、来ちゃいけないとは言いませんよ。だけど、国立大学の卒業式に生徒の数より3倍も親が来るって、やっぱりそれがいい社会かどうか。太田先生とも言いましたが、それがこれだと思うのですが、やっぱり大人が自立しないから子どもだってそうっちゃうというのと一緒に、こういう意図的か不意図的かはわかりませんが、そういう場をつくるというのは極めて大事なかなと。これ、先生のを読ませていただいてほんとうにそう思いました、私は。今、おそらく全国のどこの自治体でも、家庭支援何とかセンターとか乳幼児何とか対応室とか、ターゲットを絞った対策がいっぱいあると思いますよ。でも、それをそこまできつきつにしないで緩くするということがほんとうは意味がある。それが遠回りって、ちょっと私、表現しましたが、かなという気がしたのですがね。それが、今、立入さんが言われたようなところ。そこはきっちり決めているけど、表に出さない。

立入副議長 そうなのですよ。だから、すごく議論をして、最終段階残ったもので、もうその都度、その都度の問題は検討をしていると思うのですよね。ただ、それを表に出してない。

矢野委員 出してない。

立入副議長 ところがすごいなという感じですね。

あと、「偶発的にお弁当を食べに来た会社員の人どうする？」という話から、じゃあ来てもらおうと。来てもらって、その人たちが何度か来ているうちに——そのレコードの人はその人でしたよね。お弁当食べに来ていた人でしたよね。違いましたっけ。

矢野委員 あれ、レコードは近所の何か。

立入副議長 近所の人でしたっけ。

佐藤委員 お弁当屋さんって書いてありましたね。

立入副議長 お弁当屋さんか。

猪熊委員 ええ。

佐藤委員 近所の。

矢野委員 うん、そうそう。だけど、報告書にもありますけど、地元じゃなくて、ただ昼に来た人が企画をつくっているいろいろやったとか言っていましたね。

立入副議長 だから、いろんな人の縁で広がっていくみたいなどころはあるのかなと。

武澤委員 こういう場をつくる、場が大事だということはよくわかるのですが、それは今、国立市も、富士見台だけじゃなくて、もっといろんなところにつくりたいというのですけど、一番問題なのは、まず資金ですね。資金があるか、どうやってつくるかと。これが今は市から年間140万助成してもらっていますけれども、ほかをやるとき、市にそれをずっと頼るわけにいかないから、何か自活できる方法はないか、これがなかなか見つからない、簡単じゃない。次に人材なのです。人材、いるようで、これはなかなかいないのです。あまり給料をほとんど払わなくてボランティアでやってくれるような人を探しているわけですから。給料を払えば、それは来ますけど、それには経済的な負担ができないということで、できるだけ遊んでいる年寄りを使おうじゃないかとか、そういういろんなことを考えているわけですが、その人材がないというのと資金、この2つ、これを解決すれば、場所は先ほどの話に出ているように空き家というのがあるわけですから、そこを使ってやるということは十分できると思います。だから、そこを、今、私は資金を何とか稼ごうという意味でNPOとはまた別に会社をつくりまして、そこで第一線をリタイアした人たちを集めて、稼ぐ会社を今立てているところですけど、そこで稼いで、稼げたらそういうNPOなんか回せるようにしようと今やっているところですけど、そうでないとなかなか人材と経済、これが解決できない。いろんなアイデアはたくさんあるけれども、どうしてもこの壁を破るのはなかなか難しいというのが大きな問題だと思います。

松田議長 ありがとうございます。ほんとうにいろいろ議論が白熱するほどに、

でも、触発されるものが多い視察だったのだなというのを改めて伺って思うところでは、これをどうまとめていくかというのは、結局は、提言にどう反映していくかというところでの話になると思いますので、ここで出ました幾つかの論点とか、もちろんポジティブな面もネガティブな面もあると思うのですが、そういうことを結構しっかりと生かしながら答申という形での取りまとめに使っていただけたらと思いますので、またその段になりまして二股膏に入れるとして、思い起こしていただけてご議論いただくというようなことで、さらに続けてできればなと思っていますところでございます。どうもありがとうございます。

あと、太田先生からもメモが出ていまして、こちらも、東京女子体育大学とか一橋大学というのがやっぱりもっと連携してもいいのではないかと。慶應義塾大学に触発されたのかもしれないですね。やはり地域を見守るということに加えて自己形成にゆっくり取り組むということが支えられる地域づくりと、そういうところも非常に重要な指摘かなと思って読ませていただきました。またいらっしゃったときに少し補足していただければというところでは。

先ほどのお話もそうですけど、大学の国立との関係だとか、国立の側からの期待ですね、大きいですよ。柳田先生、いかがですか。そういうことはとすれば。

柳田委員 今、東京女子体育大学、国立市は、少しいろんなことをやって——立川市も含めてですけれども、この間、リエゾンオフィスのものを何かつくりたいということでもいろいろやって、知の拠点みたいな、そういうふうな活動は大学としてはやっていきたいというふうな、ただ、それが家庭教育支援だけに限らずというのが、スポーツ含めて、そういうところで子どもから大人まで生涯教育的なところに特徴があるというのも、かなり年を召されている方のところまでがみんなで見守りできるようになんていうふうなことで、そういうふうな活動ができたらいいのではないかなんていう話はみんな言ったりしています。

松田議長 そうですね。私も大学職なので、特にそういう連携の部署に大学の中ではかかわっているということでもちょっと思うところもありまして、大学は、連携して行うといったときに、ウィン・ウィンの関係というのでしょうか、大学がずっと貢献するのではなくて、大学を貢献してほしいというか、そういう面はやっぱりあるのかなと思ったりいたします。それは決して受験生をしっかりと送ってくれとかそういうことではなくですね。例えば学生教育ということにおいて、非常にそのことで質が高くなるというか、そういうような大学のいわゆるレベルをアップさせるということに地域が非常に力をかしていただけだとか、そういうような両方の関係ですね、そういうのがまた出てくるということも必要なのかなとちょっと思ったりもします。そういう意味では、この芝の家の当初のお話、詳しくは聞いてないのですが、これにかかわっていた学生さんの育ちというのは大きかったのだと思うのです。そのようなところも少し論点の一つに加えていただければいいのかなと思っています。

そうしましたら、この議題に関しましてはひとまずここで終わらせていただきまして、残りの時間を使いまして、ずっと積み重ねてきております今期の諮問内容に関しまして、そろそろ答申という形でのアウトプットを少し考えておく必要が出てきていると思います。前回、前々回の会議で、少し章立てをつくることでもってまとめの骨子を皆様と考えていきたいということ

で、前回の修正されたものとしてたたき台として出ていますのがお手元の資料2のほうになっています。これは大きくは、この社会教育委員会では、まずは現状を把握して、そして国立市というところでの特に家庭教育支援というのはどうあるべきなのだとすることを議論してきましたので、現状と課題をまとめた上で、今後の支援のあり方についてまとめているという、そういう2部構成になっていますけれども、前回のお話では、一段、特に打ち出すほうの部分で方針として大切にしたいということに今なっていますけれども、この答申自体に一番の特徴といいますか、こういうところを今期の社会教育委員会としては特に提言事項として柱立てしたいという、そのあたりがどのあたりなのかということとを共有する、あるいは確認するというのと、それと、あらあらこういう形で項目が出てきましたが、そろそろ、どなたがどういう形で実際に答申づくりに作業としてかかわっていけばいいかという役割分担とか、そのあたりのところも本日、少しお話し合いができればなと思っていますところですよ。

まず、今期の答申として特に家庭教育の支援という部分で柱にしたいという内容ですね。ほんとうに幾つか出てきているところではあるのですがけれども、このあたりのところで何かご意見、ちょっと抽象度が高いのでお話ししにくいかと思うのですがけれども、特にこのレジュメでいきますと2の「方針として大切にしたいこと」という項目あたりのところで何かお考えになることがありましたら、お話しいただきたいと思うのですがけれども。

例えば本日の話なんかを受けますと、場の問題なんていうのをもうちょっと強く言ってもいいのかなと思ったりはしますね。確かに子育てをする段において、ちょっと話をしたいとか、それは具体的に情報を得たいというようなこともあるでしょうし、あるいは少しご自身がそのことでゆとりを持ちたいとか、いろんな局面あると思うのですがけれども、しかし、いずれにしても、ちょっといろんな人と話をしたり何かする場というのは意外と子育てしてみると少ないということですね。よく聞くところではありますけれども。4番の片括弧ぐらいのあたりのところとの関連になってくるのかなと思いますが。

佐藤委員 よろしいですか。その4番の、今、議長のおっしゃった「親や保護者のゆとりを保障し地域のつながりが生まれるために」というところが、以前から話が出ていた子どもの居場所みたいなのがあると、芝の家は少し広がりがありますけど、子どもたちがふらっと立ち寄って勉強のことを聞いたり、いろんなことをやろうと思うときに、大人に聞ける、大人が見守ってあげられるような場所があるといいねという話は前から出ていましたよね。その話とつながるのでしょね。ここのところ、「場」という言葉はこの小見出しの下に文章として入ってくるという形なのでしょうか。あんまり「場」という言葉を前面に出すのではなくて、こういう理念を進めるためには、具体的にその下にこういうことが望ましいとか、こういう場を設定してみたらこういう結果が生まれている場所もあるとか、そういうふうに述べていく、そういうイメージで議長はお書きになっていらっしゃるのでしょうか。

松田議長 そうですね。今のこういう場を設定することでこういうことが少し進むのではないかということは、次の「家庭教育支援の方策」というところでより具体的に出てくればいいのかなど。

佐藤委員 具体的にね。

松田議長 というイメージでちょっとつくってみました。

佐藤委員 ということは、4番のあたりだと、こういうふうの一つの家庭だけに子どもの教育を押しつけると言ったら変ですけど、するのじゃなくて、少し家庭に余裕がない場合も地域がカバーできるような、そういう体制をつくる必要があるだよというようなことをここで述べていくということですね。

松田議長 はい。

佐藤委員 じゃ、7番の「家庭への支援と子どもへの支援を」というところも少しつながりがありますね。

松田議長 そうですね。

佐藤委員 この辺、大事ですよ。

松田議長 はい。これ、分けするのが逆に曖昧になるという議論もあったのですが、でも、両側において支援というものがなされていなければ、家庭教育自体はやっぱりゆとりを持って進められないのではないかなというように、お話のようなところかなと思います。

佐藤委員 ちょっと順番でいう最初の1のところを伺ってもよろしいですか。

松田議長 はい。

佐藤委員 1のあたりでは「現状と課題」ですよ。

松田議長 はい。

佐藤委員 これは、国立市の現状がこうだという、今までいろいろな行政の取り組みも聞いてきましたし、各部署とか地域でやっている現状、学校でやっている現状というのをまず1番のところでこういうふうな——1番は、こういう形が今必要とされているというふうなことを書くわけでしょうか。それとも、現状はこうなっていますよというふうなことを書いて、2番の「国立市の家庭教育への取組」のところで具体的に教育委員会では何をしているかというふうな具体論をここで書いていくとかということですか。

松田議長 そうですね。

佐藤委員 最初のところでこういうふうな現状であるという、前、校長先生とかからお話を聞いたような学校の現状とか、そういうものを最初に押さえておくという形なのでしょうか。

松田議長 この委員会でまずお話を伺ったのは、国立市がどういうふうなスタンスで家庭教育を捉えたり行ってきたのかというようなことから始まりまして、支援センターだとか委員会だとか、そういうところの皆様にはヒアリングを行うような形で、そういうところから一つ実情としての国立市の家庭教育というのが少し出てくるのかなと思っております。3番のところは国立市を広く周りの状況との関係で考えるためにも、全体としてはどういう動きなのだろう

うということで、これは市の事務局のほうが最初にいろいろお示しくくださった資料とかあると思うのですけれども、ですから、ここは事務局の方にまとめていただいてもいいのかなと思ったりしているのですが、そんな、今、聞かれて、初めてのことなのでびっくりされていると思いますけれども、というようなことがあって、それで、現状から考えたときに課題というふうな形で視点を当てられるのはこういうところなのかなというのが4番で出てくればいいのかというような流れをイメージしています。

矢野委員 よろしいでしょうか。

松田議長 はい。

矢野委員 私も前回のことしか経験がないものですからあれなのですけど、前回のときは、どちらかというと自分たちの土俵の中で、私でいうとNHK学園としてとか、東京女子大としてはとか、一橋大学としてとか、学校の「ほうかごキッズ」でしたっけ、その取り組みを書いて、のりしろというか、そのつなぐところを議長さんが中心になってやられたのですね。今回はおそらくそういう感じじゃないのではないかと、私、思うのですよ、正直申しますと。これ、逆に言うと、ここからはかなり独断と偏見というか、あれですが、これは議長さんに決めていただいて、ここは要するに誰でも逆に言うと書けるはずなのです。これだけ1年間みんなで共有していたのだから。私が2番を書けて言われたら、住んでいません。だけど、データももらいましたし、いろんなあれももらいましたから、書こうと思えば書けるのです。だけど、そげ落ちているのもあるかもしれない。わからないですね。だから、何を言いたいかという、決めていただいてちょっと書いちゃったほうがいいのではないかという気がするのです。それで見てみると何か変だねとか、これはもっと足したほうがいいと。おそらくこれ、松田先生にお願いすれば、3日、先生を缶詰にすれば。それはさっきのができたとき、もうこれね、皆様読んでくれると、すごいのですよ、これ。疑問もいっぱいあるのですが、先生、どのぐらい関与したかわかりませんが、ここでたしか芝の家と、最後、千葉の「こもんず」でしたっけ、そこの代表の方もずっと入っていらっしやったりするから、現場力もあるし、理屈部門もなるほどなと思うところがいっぱいあるのですね。ちょっとそれは余談ですが、やっぱりそれはさっきの、強引に場をつくる。これだけ議論していると私も正直、結局、いじな人間なのか、あんまり人間に度量がないのか、人間ってそうですよね。結局変わらないし。でも、これだけの情報を持ったのだから、ある程度書くという意味では大事ですし、それを多くの先生がチェックしながら積み重ねて、これ、ひょっとすると、この前は最後追い込みのように一発で書いて、最後、セメダイン作業のように議長が大変な思いをなさったのですが、これ、そういうわけにいかないかなという気がするのですよ。ちょっと1回、11月ごろかわからないけど、1回見てやっていかないと、これどおり——ストーリーが違うというなら、皆様、「こんなストーリーあり得ないよ」って言ってくださればいいと思うのですが、おそらくこれでいいと僕は思ったのです。さっき一番初めに言いましたけど。これにどう誰が書くかということがすごく雌雄を決するはずだと思います。芝の家を見ても、さっき言ったように、僕みたいにどっちかという評価している人もいれば、武澤先生なんか全然参考にならないという人もいます。それっていいことなのです、実は。みんながいいということは、やっぱりちょっと昔の天皇制……そんなこと言っちゃいけない。それとか同じでよくないのですよ、やっぱり。そんなね、いいと

ころ、これはすばらしいからまねしようなんていうほど世の中単純じゃないわけで、やっぱりそれをどう書き込むかというのは、誰がどう書いてからそれに反対意見を書くとかね。大まかなストーリーさえよければ、本日、先生が、じゃあこれ誰々というのを決めるのは大変かもしれませんが、やられたほうがいいのではないかという気がするのですけどね。早目に、まだ8月ですから。

佐藤委員 公民館の答申を書くときには、それこそグループつくって担当を決めて、それこそ第1章のこの部分はどこが書くとかというふうにやるわけなのです。大事なものは、書いたものをみんなの前で読み合っ、いろいろな意見を出して、違ったら書きかえも含めてやるのです。それがとっても大事で、書いたものが全部正しいということはないのだから、必ずみんなが意見を出して、そこで修正を加えてみんなで共有できるものに仕立て上げていかなきゃいけないから、それが、先生がお一人で書いたら完璧になるかもわからないけど、みんなで分けて書いたらそこが非常につながりも悪いし、重なっているし、こっち全部削除しなきゃいけないとか、ここを全部書き直すとか出るので、それがとっても大事なことだと思うのです。だから、矢野さんがおっしゃったように、もうある程度そういうふうにしてしまうのならしてしまって、そのかわり、書き直すとか意見を必ず言うとか、変わる場合ももちろんあるということ承知の上でたたき台をつくるというふうにしていかないとだめだと思うのですよね。公民館の場合はグループでやりましたけれど、議論して、グループの中で誰かが書くということにももちろんなるわけですけど、それができないようであれば、もうこういう市外からも含めてのグループ、それぞれ立場が違う忙しい人たちのあれではグループができないようだったら、ほんとうに担当を決めてやらざるを得ないと思います。

矢野委員 2つの意見まとめているのですね。2人競い合わせるわけじゃないですけど、さっき言ったように違う意見があるかもしれないので、それで今おっしゃったみたいに議論しながら、どちらをとるのか、ドッキングするのとかということもあると思うのですよね。

佐藤委員 だから、担当を今おっしゃったように2人にして、その2人で話し合っ一つにしてもいいし、それぞれが忙しいから合わないから、それぞれが書いてきて、ここで発表するというのもいいのかもわかりませんが、少し粗いかもわからないけど、やってみないとどうしようもないかなと思うのですよね。ただ、例えば量的なものとかだけはある程度決めて、例えばこれぐらいの字の大きさにA4・1枚は書きましようとか、2枚は書きましようとか、何行かで終わったら困るわけだから、それぐらいのことはしておいたほうがいいのかもわかりません。箇条書きにする人もいるだろうし、小見出しつけてちゃんと書く人もいるかも知れないけど、その辺とかをどうするかは少し議論したほうがいいのかも。

松田議長 はい、ありがとうございます。少し進め方についてご意見が出てきたところですけども、まずは、ほんとうにいろいろな議論を積み重ねてきていますし、資料は共有しているところがありますので、少し分担を決めてたたき台をまずつくって、それを皆様でまた読み合わせる形でまとめていくのはどうかというご意見をいただいているところですが、ほかにご意見とかございましたらお願いしたいところがございますけれども。このままの流れでいきますと、じゃあそういうことで分担を行いますという話になりますけれど

も。

佐藤委員 いずれにしても、前回もみんな担当して書いたのです。何かは書いたのです。ですから、全員、何かは必ず書くことになると思います。

矢野委員 でも、私、一番初めに言った記憶があるのですが、おそらく今回は、みんな書くのですが、結果的にもしかすると、極端なことを言うと、ものすごくちょっとしか残らない人がいるかもしれないし。

佐藤委員 ああ、そうそう、そうそう。

矢野委員 すごく、それはわからない。

佐藤委員 うん。いや、ほんとう、全削除があったっておかしくないですよ。

矢野委員 そう。ただ、議論するプロセスが大事なのであって、いろんな価値観、いろんな意見があることが大事だと思うのです。

佐藤委員 そう。

矢野委員 それを一度、文章化して、もう一回、共有する。それを最初にもう先生から書いてもらっちゃおうと、みんな、「そうですよね」という、これじゃ半年前に店じまいしましょうという感じなので。先生にはちょっと担当に入っていたかないとか、最後の一番のあれになっちゃおうと思うのですが。

佐藤委員 先生は専門家の目でそのあたりをこうだということを言っていたきながら、最終的にはまとめる作業というのはやっぱりお願いせざるを得ないところがありますので、そこのところは先生がやってくださると思えば、そういう意味では私たちは大船に乗った部分があるので、土台になって消えていく運命であっても、たたき台はつくらなきゃいけないかなと思います。

松田議長 そんな、消えていくことを前提にですね。議長としての取りまとめ役の果たすべき役割というのはあると思いますので、それはさせていただければと思っています。それと、今回、柳田先生とか太田先生とか矢野さんとか私とか、そういう文章もわりと書いている、非常に強力な根本先生もいらっしゃいますし、そういうふうを考えますとわりともうお力を集めるだけでかなりの強力な部隊でございますので。そうしますと、ただ、ちょっと私、思いますのは、たたき台をつくるにしても、やはりご自身が関心があってエネルギーが出るというところが一番たたき台もつくりやすいのではないかなと思うところがありまして、そうしますと、例えば今出ている目次案で片括弧がついているところがあるのですけれども、これは全部で32個あるのです。で、10名委員がいるということで、平均しちゃいますと1人3個でございますけど、それはあまりにも平均してしまっていますので、そのあたりですね、例えばお一人2個はご担当いただく。そうすると4個ご担当いただく方もいらっしゃるといような、そういうようなぐあいかなという。2個から4ないし5個ですね。今ちょっとお話しした5名はどちらかというと後で選択をいただきたいのですけれども、2個ないし5個ぐらいの範囲でたたき台を、じゃあこれをつくってみたいと思われるものをちょっとお聞かせいただいで決めていったほうがいいのかと思ったのですが、いかがでしょう

か。

佐藤委員 ちょっといいですか。

松田議長 はい。

佐藤委員 2の2の「家庭教育支援の方策」、つまり一番具体的なものを書いていく部分ですけど、これは少しまとめを議論した中で具体的になってくるのではないかなと思ったのですが、ここの部分、2の2の部分、「家庭教育支援の方策」については、少し後でも、少しまとまってきたことで具体的に見えてきて、それを入れていこうというふうになるので、これは順番からいうと少し後でもいいのかなと思ったのですが、そういう。

矢野委員 2の2で一番後ということですか。

佐藤委員 そうそう、そうそう。つまり、具体的なことでしょう。

矢野委員 いや、ここがでも、一番難易度高いですよね。

佐藤委員 難易度高いから、こういうことが必要で、こういうことをやっているけど、こういうことをやっていきたい、こういう事例はあるというのをした後で、具体的にじゃあ国立ではこういうことをやっていこうというのが一番後ですよ。

矢野委員 うん、そうなのですけどね、どうなのですかね。それがこう。

佐藤委員 やっぱり並行してやったほうがいいですか。

矢野委員 いや、わからないのですけどね、そういうふうになればいいんですが、これも結局、全部じゃあ1)から9)の項目が最終的に網羅されるかどうかもわからないのですよね。

佐藤委員 そうそう、そうそう。

矢野委員 うん。

松田議長 入るかどうかわからないです。

佐藤委員 これは、ありそうな部分を今までの議論の中で拾い出して書いていただいていますよね。

松田議長 そうです。

矢野委員 で、全部入れると総花的になって、この答申、一体何言っているのだというふうになっちゃうこともありますし、だから、一応、私としては、こう1行で書いているとよく見えるのだけど、実際書いてみたら何だか無理筋というかね、特に国立ではさっき言ったように全然参考にならなくなっちゃうかもしれないし、やっぱりとりあえず置いていったほうがいいのではないかなと。

佐藤委員 だったら、2の2は、1人か2人かわからないけど、ここのところだけを書く人をつくってというふうになりませんか？市は、その前に、こういうふうの方針として大切にしたいから、こういうことが今度はあってほしいみたいな具体的なものが書いて。

矢野委員 これも私のほんと個人的な、勝手な、よく怒られる、番組をつくる時にも。やっぱり私のあれでいくと、さっきおっしゃった、例えば太田先生が書いた目線と佐藤さんが書いた目線と違うはずなのですよ。で、両方必要だと、僕、思っているのです、今回は。だから、太田先生に書いてもらったら、ば一っと書いて流れちゃうのです、特に2番で。だけど、地に足ついてないという言い方すると言ったら怒られちゃうのですけど、だって、そんなことできませんよと。ないのだから、ということになったりするのです。そこが難しいのではないかと、今回、僕、思っているのですよ。具体的な事例を自分たちはこうできますよ、ああできますよという意思表示を前はしたのが集まったということでやりやすかったのですけど、今回、小学校でもそうですし、東京女子体育大学もそうですけど、うちで今後こういうことをしますよって書けないはずだと思うのです。書かれても困るし。でも、こういう方向性もあるのではないのですかというようなところでとまるはずだと僕は思っているのです。それが一橋もそうなのですけど、そこの先生が自分で書くことと、やっぱり特に地元にいっちゃる3人の方がこうあってほしいということと、うまく縦横で結びつくのが一番いいかなという気がするのです、できれば、そういう意味ではうまく複数で特に最後のところなんかあったほうがいいかなという気がしますけど。

佐藤委員 私が思ったのは、似たことを言っている部分があるのですけど、2の2の「家庭教育支援の方策」のこうしたらいいよという内容の中で、例えば『サード・プレイス』を市民のものにする支援」ということで書けて言われて書くよりも、上のほうを書いた中でこういうことが必要だよというのがたまたまサード・プレイス支援かもわからないと思うのですよね。「サード・プレイス支援」という言葉ではないかもわからないけど、似たようなことに、これは後で分けてみるとサード・プレイス支援なのかもわからないということになるわけだから、こういうことが必要だよということを書けば、それが何の支援になるのかというのは後で仕分けてもいいのかなという気もしたのであるよね。だけど、1人が書くのではなくて何人かの人が書いたほうがいいというのは、目が幾つかあったほうがいいというのは、それは賛成。

矢野委員 特に大切なところはあったほうがいいのかという気がするのですけどね。

佐藤委員 複数書いたほうがいいですね。

矢野委員 「サード・プレイス」と言うとは何かと思うけど、さっきの「場所」って言えば、それで、ああ、そういうことかと思えますよね。

佐藤委員 うん。

矢野委員 だから、議長がおっしゃったように、ぜひここは書きたいということは、やっぱり尊重していただけるということであれば大変ありがたいですし、何でもいいですというのだったら、こうなったら議長にもう運命をともしして、

今ここで言うのもあれでしょうから、後日、メールか何かでこう。次回言う  
と遅いので。

松田議長 そうですね。

矢野委員 ええ。

松田議長 例えばですけどね、こういうイメージもあるのかなと思ったのですが、  
例えば武澤さんがずっと、ICTはやっぱり今の子どもたち、家庭でってお  
っしゃっていましたよね。そういうご関心からすると、例えばですけど、1の  
3の2)で「子どもの育ちや教育をめぐる課題」というのはこのあれじゃな  
いかというのがあって、それで、2の1の3)のところで、こういうことが  
大切なこととして家庭でしっかり学ばれてほしいってなって、それで今度、  
2の2の4)のところで「ICTに関わる家庭教育支援」だから、これはいい  
と。

佐藤委員 つながるのですね。

松田議長 ええ、3項目とっていただくと、そういう一連に。

矢野委員 それ、素晴らしいですね。ブロックじゃない。

立入副議長 先生、一応、ある程度、この意見は今の武澤さんのおっしゃったよう  
に、今までの経緯からいって、それは武澤さん、よくおっしゃっていたよな  
という内容ですよ。

松田議長 はい。

立入副議長 だから、武澤さんをお願いしたいとかという心づもりがあってきて。

松田議長 いえいえ、そんなことはないです。ただ、矢野委員とか佐藤委員がおっ  
しゃるように、でも、大切なことを家庭でといったときに、ICTの問題だ  
けとは限らないですよ。ですから、ほかの方のご意見が。

矢野委員 こういうのどうですかね。1、「国立市の家庭教育をめぐる現状と課題」  
が1つですね。大きい2の1の「方針として大切にしたいこと」ってあるじ  
ゃないですか。

松田議長 はい。

矢野委員 そこと最後の2の「家庭教育支援の方策」って、この3つの分野で毎回  
書いてくると。

松田議長 なるほど。

矢野委員 書けなくてもいいから。分担を決めるということも確かに何か難しいです  
けど、やっぱり自分が書きたいと思うということであれば、もしかしたらこ  
の子ども家庭支援センターのことをもう一回思い出して書いたりして、それ  
がリンクしていくかもしれないですよ。だから、そういうのって確かにい

いかかもしれないですよ。で、空白が出るのかもしれませんが、それはまたちょっと調整するなり、ボツにするのか、議長が「それは大事だから僕が書くよ」とか言うかどうかわかりませんが、もしかすると縦の問題意識が一人一人に大切なのかもしれませんね。

松田議長 ええ。ほんとうにそれをたたき台にして、佐藤委員がおっしゃったとおり、皆様でもむプロセスが最後やっぱりこの委員会としての力ですし、意義だと思いますので。

矢野委員 9月までにとにかく1回やるのもいいかもしれないですね。

松田議長 えっ、そこまで。

矢野委員 早過ぎる？

松田議長 日程が急に出てくると急にリアルに。個人差があると思いますので、早くたたき台を出していただける方から出していただいて、お話を進めて。

矢野委員 でも、じゃあ、9月、何を話せばいいんだってなっちゃいますよね。強制的にあなたとあなたは先に書いて出してよというの。

佐藤委員 できますよ。矢野委員が。

松田議長 そうそう。僕も矢野委員ぐらいからちょっと書いていただいて。

矢野委員 文章じゃなくてもいいですよ、こうなったら。さっき言ったITで何とかする。武澤さんは9月当選確実になりましたから。

佐藤委員 いや、矢野委員も当選確実で。お二人いたら、もうこのことはばっちりです。

松田議長 ええ。そういう形で、分量的には、前回の答申を見せていただいたのですが、それほど大きな分量の答申ではないですね。ただ、内容的に今回はかなり突っ込んだ内容をお話ししていますので、1つずつの項目に対しては、例えば400字ぐらいを一つのめどにさせていただいて、これは増えても減っても構わないと思うのです。ある程度を目安、その辺、事務局、いかがでしょうか。これ、もし例えば1項目400で平均してとおっしゃったとすると、32項目になって400字詰めで32枚ぐらいになりますから、例えば今のサイズで、この前の答申でとると十七、八ページぐらいになっちゃう感じですね。

事務局 A4・1枚で400字詰め3枚ぐらいでしょうか。

松田議長 そうですね。

事務局 そうですね。

松田議長 30・40でございまして。

事務局 10ページとちょっとということであれば、構わないと思います。

佐藤委員 それに、そのままが生きるわけではないので。

松田議長 もちろん、そのまま生きるわけではないですけども。

事務局 当然そこに、文字ばかりではなくて資料であるとか参考の、芝の家の資料や、現状、国立でこういうのがあるというのが一覧表でつくとか、そういうこともあり得るかと思うので、分量的にはこれは問題ではないと思います。

松田議長 ありません？

事務局 はい。100ページの大論文といったことでなければ大丈夫かと思っています。

松田議長 じゃあ、スタートの目安としては1項目400。オーバーするのはこだわっていただく必要はほんとうにないと思うのです。やっぱりまとまって書いたら三、四枚になっちゃったというのは全然構わないですけども、何か目安がないと、まとめるのはですね。初回以降、検討いただく際には、その400が完成してなくても、部分書きでも結構かと思えますし、あるいは構成としてこんな内容を書きたいのだというようなことでも構わないかなと思うのですけれども。大分外枠が出てきましたので、それぞれの委員の方に、時間も大分、もうそろそろというところですので。

佐藤委員 議長、よろしいですか。

松田議長 はい。

佐藤委員 先ほど議長がちょっと説明をしてくださった1の4の「国立市の家庭教育支援の課題」というところ、事務局に書いていただいてもいいのですがという話をちらっとされていました。

松田議長 1の3？

佐藤委員 あ、違う。1の3ですね。3のうちの1)と2)のあたりですか。1の3の。

松田議長 そうですね、あるとすれば。

矢野委員 でも、それは、行政から委嘱を受けているのに、それを戻すのはやっぱりよくないと思う。

佐藤委員 資料で。

矢野委員 いや、それはね、1回、僕らの中でそしゃくして、それで出すデータも含めてね。「いいじゃん、数字ぐらい」って言うかもしれないけど、やっぱりそれは大事だと思うのですよね。

佐藤委員 そうですね。

矢野委員 うん。

松田議長 すみません、私がちょっと惑わすようなことを言ってしまいました。

佐藤委員 いえいえ、いえいえ。やりたいものではないかなと思ったものから。

松田議長 どうしましょうというところでは、やっぱりこれ、なかなか言い出しにくいというか、時間がですね。

佐藤委員 先ほどの武澤委員はこれとこれとこれがちょうどつながっていいのではないかと議長がおっしゃったように、ああいう感じで。

矢野委員 そう、その三段論法を宿題で次の9月までに、私は今までの話でこういうことにこだわって、これを大切にしたいし、こういうことを書きたいというのを集めるのでいいのではないかと思いますけどね。

松田議長 そうですね。穴あきが出て、まずはそれぞれの委員の皆様方からそれを出していただくというのも確かに手だと思います。

矢野委員 ええ。武澤委員の例を書いていただいて、そうすると川廷さんや太田先生も大体。

佐藤委員 ちょうど欠席の方もおいでになればね。

矢野委員 そう、含めてね。それが大事だと思うのですよ。私はこれにこだわっているってね、川廷さんが図書館の本のこととか言っていたし、そういったところの体験も含めて、これからどうするというのにまで引っ張ってってもらえばいいわけですから。

松田議長 いよいよ宿題が出る委員会になってきましたけれども、委員会のときにだと、多分、事務局のほうは資料として整理するのが厳しいと思いますので、少し日程をご検討いただいた上で、開催案内とともに何日までに事務局のほうへメールで送ってくださいという形で。完成稿というようなイメージを持っていたかなくても結構だと思いますので。

矢野委員 そうですね。

佐藤委員 そうですね。

矢野委員 それをやると、何かもう登校拒否になっちゃう。(笑)

松田議長 場合によってはメモとか箇条書きで、こんな内容でこういうふうにというような簡単なものでも結構です。

矢野委員 最後。

佐藤委員 最後ね。

矢野委員 三段論法。

猪熊委員 議長さんに意向を。

矢野委員 あとはちょっと意思表示で。

松田議長 じゃあ、おまとめいただく、あるいはメモをつくっていただくときに、一応、この目次案をたたき台にしまして、書いていただく項目に対して、1の1の1) だとか、そういうインデックスといいますか、目次をつけていただいてメモをつくっていただくと。それはかぶっても構わないということで。

矢野委員 そうですね。

松田議長 また、2本ラインを、武澤先生、それだけじゃなくて別なラインも。

矢野委員 もう何か全部書けじゃないの？（笑）

武澤委員 結果は書けないです。これは、僕はこういうのを書いたことないですけど、あんまりどこかのやつをコピペするというのはよくないわけですね。

矢野委員 それは絶対だめ。それだけは絶対だめ。

佐藤委員 それ、絶対だめ。

松田議長 何かかたい文章よりも、やっぱり素朴な、委員会でもお話があった、ほんとうに素のレベルでの言葉で出していただければありがたいです。

矢野委員 それ、あれですか、「である調」ですか。

松田議長 前ははどう。

矢野委員 前日もである調ですよ。

佐藤委員 「ですます調」じゃ。本日持ってこなかった。さっき見ていた？

武澤委員 それから、あんまり固有名詞は出さないとか。

矢野委員 「である」ですよ。やっぱり答申というか、こういうのってやっぱり一応「である調」じゃないですか。

事務局 「である調」ですね。

矢野委員 優しく「である調」。

事務局 語尾等の調整は幾らでもつくことだと思っているので、今後でいいと思います。あと、今、引用といった場合、引用した場合、その参考文献や引用文献というのを巻末等に記入していただき、文章の部分を鍵括弧で囲っていただければと思います。

矢野委員 それは重要。

事務局 それは当然、論文なんかと同じようなので、逆に言うと、ここのこういう内容を引っ張ってきたい、これが言葉としても、また説明としてもいいのだということがあれば、それは引っ張ってきていただきながら、本の奥付についているような情報を記載していただきたいと思います。

矢野委員 どこから持ってきたのか。

事務局 余すことなく、どこから持ってきたのか、何年発行の何という人が書いたもの、また、誰々が編集した何という本の何という論文ですかという情報を押さえておいていただけると、最終の編集が容易だと思います。

松田議長 ほんとうに書くということに関してあんまりハードルを高く持っていたかかないというのを皆様前提で進めていきたいと。作品として報告書をつくるのが目的なのでは決してありませんので、書くことは一つの表現だけであって、問題なのはどういう提言をしていただくか、検討したかという内容だと思いますので、ぜひその辺は素朴に思われていることとかお話をしたことをまとめていただければと思います。

そうしましたら、一応、次回の委員会では、そういう形でまず対応いただきながら検討を進めていくということで進めてまいりたいと思います。

では、本日は内容としては以上でございますが、何か委員の皆様からございますか。

では、事務局のほうにお返しさせていただきます。

事務局 それでは、次回日程は9月16日（火曜日）になります。時間は本日は異なりまして19時から、夜7時からの実施になります。今、委員の皆様でご協議いただいて決まったところについては、事務局で一覧にまとめたものをお配りします。そうすると、虫食いの部分が出てきたりとか重複したりとかということも一目瞭然になりますので、その上げていただくのを1週間前の9月9日が火曜日かなと思うのですけれども、そこまでにメールで頂戴するという事でよろしいでしょうか。

矢野委員 それはあれですよ、今後書くだけじゃなくて、ちょっとこんなことを書くんだということ添えておかないとまずいですよね。

事務局 そうですね。はい、そこの部分の骨子というのですか、方針というのですか、が入っていると、なおありがたいかなというふうに思います。いずれにしても、9月9日（火曜日）までにメールでいただければ、こちらでまとめて16日の当日に皆様にお配りするという形になります。

松田議長 確認なのですが、9月9日までですので、その段階でもう文章になっている方はそのままを。

矢野委員 極力そう、なるべくそのように。

事務局 そうですね。

矢野委員 そうなのです。

松田議長 もっと別につくっていただければよろしいですね。

矢野委員 そうです。と思います。

松田議長 それでも構わないし、箇条書きでも場合によっては構わないという形で。

矢野委員 それと、欠席の委員の方への周知の仕方って結構難しいかと思うのだよね。

松田議長 ああ、そうですね。

矢野委員 ねえ。

佐藤委員 今の決め方だとね、余計難しい。

矢野委員 で、誰かによってこれもまた大分変わっちゃうと思う。

佐藤委員 それぞれがみんな考えなきゃいけないのかなみたいな。

松田議長 ちょっと事務局のほうにもお骨折りいただいてよろしいでしょうか。

事務局 はい。メールでお送りしつつ、口頭で説明したいと思います。

矢野委員 そうですね。ちょっとメールだけでは伝わらないかもしれない。

事務局 お伝えするというようなこともしながら、ご理解いただけるようにご説明させていただきたいと思います。

矢野委員 はい。

松田議長 それでは、大変お疲れさまでございました。以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

— 了 —